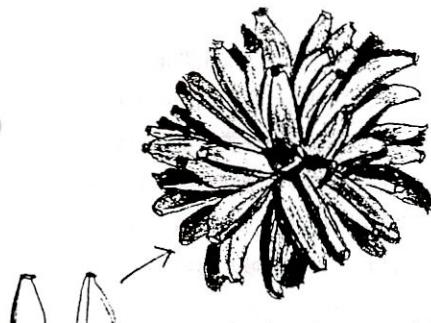


# 協議会ニュース

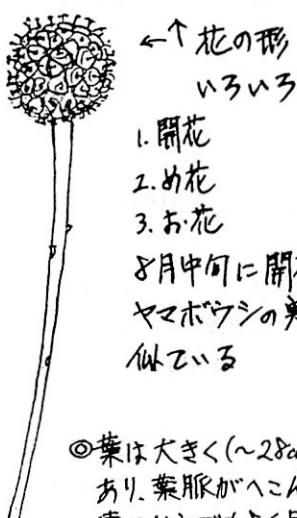
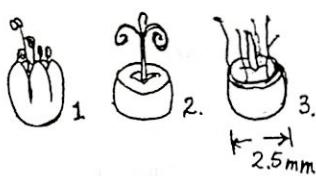
59号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1996.10

カンレンボク(オキリ科)  
雌雄同株



ミニバナナのようなそう果  
10月下旬に黄色になり熟す。  
←60個もついている。



8月中旬に開花。  
ヤマボウシの実に  
似ている

◎葉は大きく(～28cm)つやか  
あり、葉脈がへこんでいるので  
遠くからでもよく目立つ。



’96-8. 県緑化センターにて。そう果は’94-10-22.  
東山植物園でスケッチ

(5)

## 「アンケートからみた自然観察会の動き」

鈴木友之（東三河支部）

### ●支部黎明期

1981年に結成された、愛知県自然観察指導員連絡協議会の意向で結成された東三河支部（1982年夏）は、別称を東三河自然観察会として、スタートを切りました（会員は21名）。当時は一般に東三河と言えば、奥三河支部も含めた、自然豊かな広域でしたが、県行政による、豊川下流域と判り、戸惑いがありました。

秋の受講者を加え、21名で、1983年から始まる、支部活動については暗中模索の中で、検討を重ね、春に第1回の自然観察会を実施することに決定をしました。

会員の勉強会と、一般参加者を募っての自然観察会の2本柱として取り組みました。

1983年4月29日、蒲郡市竹島にて「春の自然教室」として実施しました。事前の下見は、3月上旬の寒い日に始まり、取り組み内容を煮詰めるうち、苦労したのは、如何にして参加者を集めかでした。PR方法は、新聞等のマスコミ報道への依頼、行政発行の広報紙への掲載、及び会員による知人等への誘い等に奔走したこと、参加数を知るための、事前申し込みを代表宅で受け付けたこと等でした。

弁当持参の観察会で終了時にアンケート記入をお願いした（表1参照のこと）。

{参考メモ} 参加費 180円を頂く。内訳は保険料20円、通信費 100円（申し込み者への案内はがき、及び、結果報告文の郵送）でした。

### ●支部活動定着へ

年を重ね、会員の増加する中で、試行錯誤を繰り返す日々が続きました。毎回行うアンケート結果を参考にし、次会に生かす努力を重ねながら設問事項も、性別、年齢、居住地、参加回数、催しの知った理由の5項目は現在まで続いています。他には、内容について、説明につい

て、ポイントについての良し悪しなど、観察会への参加方法、今後の開催希望地、時期、意見等を問い合わせることが多い。

参加者の反応としては、内容等では、「良い」が圧倒的に多い（儀礼的な言葉も含まれる？）。場所と季節では、自然豊かな山間地で、春又は秋季に多いが、年間の行事計画との兼ね合いもあるので、努力目標の域を脱し切れない。

年間を通じて同一地での自然観察会（1986年豊橋公園で5回実施）などは、参加者には四季の変化もあり喜ばれるが、広域からの参加者は得にくい等、反応は多様でした。回数増は、会員への負担増もあり難しかった、これらを解決する手法として、会員を3班に分割し担当班内で努力する方向へ進んでおり、担当外の会員は自主参加制とし、自己研鑽の場を与えるよう努力をする、観察会の事前の下見（年8回）や自然の中での会員研修会等は、肩の凝らないもので、意義ある催しと思っています。

### ●アンケート結果（表2を参照のこと）

初期（1983～1985年）、最近（1994～1996年）を対比した。

#### 1 性別

変化は少ない。

#### 2 年齢別

AはBに関連が深い。Bは幼児や小学生を連れて参加する家族が多い。

Dは増加傾向が際立つ。マイカー運転の可能な人も多くなり、公共交通機関の利用度は減少しており、駐車場の有無にも配慮が必要。

#### 3 住まいは

支部主催行事は地域性が非常に大きい。県主催では参加者が広域に亘るのは当然で、知名度と公共交通機関利用者増を忘れないこと。

#### 4 参加回数

当然と言えよう。

### 5 観察会を何で知ったか

- 初期は、知名度の皆無と言える支部としてはAの地域の行政発のものや、Bへの依存度が大きかった。東三河支部では他の支部以上に努力していると考えるものはCです。
- 支部で作成した年間の観察会案内チラシを前年度参加者を対象にして、郵送している。

表1 自然教室に関するアンケート

#### 第1回（1983年）蒲郡市竹島

次のことについて、あてはまるものを○で囲んでください。ご意見もお聞かせ下さい。	
1 自然教室のあることを何で知りましたか。	
ア 市の広報紙	イ 新聞の記事
ウ ラジオ	エ その他（ ）
2 参加しようと思った理由は。	
ア 自然に関心があるから	イ 何となく
ウ 知人にさそられた	エ その他（ ）
3 参加してどう思いましたか（理由を書いて下さい）。	
ア 良かった	イ つまらなかった
理由（ ）	
4 自然教室を今後も計画しています。あなたのお考えを。（次回は9月15日豊橋市石巻山）	
ア 出来れば参加したい	
イ 参加しない	
ウ わからない	
5 自然保護活動をどう思いますか。	
ア 必要	イ 現状のままでよい
ウ その他（ ）	
6 会に対しての要望、そのほかについてのご意見がありましたら書いて下さい。（ ）	
ご協力ありがとうございました。今後の活動の参考にさせて頂きます。アンケート用紙は水族館入館までに係に提出して下さい。	
----- キリトリ線 -----	
次回は秋の自然教室（石巻山）9月15日（祭）です。是非ご参加して下さい。	
東三河自然観察会	

・公共施設の窓口へチラシを置いてもらい、品切れに注意し追加している。

・最近では観察会当日の受付けで、個々の観察会案内を希望者に、実費を頂いてその都度郵送している。

・新聞社、放送局等へのPR依頼を観察会毎に事前に行っている。

#### ●今後の課題など

- ・観察会のマンネリ化傾向の打破はないか。
- ・取り組み内容の再検討も必要。
- ・指導者固定化傾向を避けるための工夫をし、層の厚みを増し、幅広い対応を望みたい。
- ・指導員派遣も増しており、オブザーバー的な参加も有益と考えて、初心者？の登用に期待しています。

表2 アンケート結果（初期と最近の変化など）

主要説明		初期 1983～85年	最近 1994～96年
1 性別	男性	37%	39%
	女性	63%	61%
2 年齢別	A 19歳未満	12%	9%
	B 20歳～39歳	29%	24%
	C 40歳～59歳	37%	35%
	D 60歳以上	22%	32%
3 住いは ( )内は 県主催 分	東三河	約90% (50%)	約90% (63%)
	その他	約10% (50%)	約10% (37%)
4 参加 回数	初めて	51%	12%
	5回以上	11%	39%
5 観察会 何で知 ったか	A 広報紙など	50%	15%
	B 新聞など	30%	35%
	C 支部の案内	20%	50%

表3 第60回1996年豊川市赤塚山周辺  
「(自然観察会)」アンケートのまとめ  
(回収33名分)

1 性別は?

男性 12名	女性 21名
--------	--------

2 年代は?

中学生以下 3名	16~19歳 1名
20~39歳 2名	40~59歳 19名
60歳以上 8名	

3 お住まいは?

豊川市 19名	豊橋市 7名
宝飯郡 4名	その他 3名

・1~3の項目から、地元から参加者が友人グループが多かったことがうかがえる。

4 今までに自然観察会に何回参加されていますか?

初めて 9名	2回目 6名
3回目 3名	5回以上 13名

5 この観察会を何で知りましたか?

ちらし・会からの封書 11名
新聞 8名 (朝日4、中日3)
友人・知人 6名
その他 5名

・5の項目から、新聞の案内によって参加している人が割合多く初めての参加者9名につながっているかもしれない。

6 本日の内容は?

良い 24名
やさしい 3名
無答 1名

7 本日の内容で良かったもの(3つ)

畔道の植物 21
寺社林 17
オトシブミ 17
野鳥 16
白川ホタル等 12
アリジゴク 7
三本松 3

8 指導員の説明はどうでしたか?

良い 29名	やさしい 5名
--------	---------

### 9 感想・意見・希望等(原文のまま)

・私は近くに住んでいたながら、こんなに豊かな自然の良いところがあるなんて知りませんでした。今日は本当に楽しく良い勉強をさせて頂きました。お礼申し上げます。

・カツツブリが見れなくて残念でした。鳥の声をもっと聞きたかったな。オトシブミ等よかったです。ありがとうございました。

・分かりやすくてよかったです。いろいろな実験もやってよかったです。知らなかったことが、詳しく分かりました。もう一度参加したいです。

・すごくよかったです。またやりたいです。

・身近にある植物の名前や生物を知ることができて楽しかったです。

・お天気もよろしくよろしかった。虫の住みかも知って良かった。

・自然の生態系について本日更に生々しく認識が出来ました。

・宮池で鳥が観察できなかったのが残念ですが、草木の名前が覚えられてよかったです。

・丁寧で分かりやすかったです。

・オトシブミの質問で、落ちてしまったものについて適切な答えがでなかったのが残念です。

・有難うございました。また、お願いします。

また、参加したいのでお願いします。

(同様の内容で5名)

## ブナの森の民俗—木地師の残像

川辺泰正（西三河支部）

山々の資源を求めて移動した集団には、木地師、鋳物師、鉱山師、狩猟民などがあった。木地師は、木地挽、杓子屋などとも呼ばれ、轆轤（ろくろ）を使っていたことから轆轤師とも呼ばれていた。木地のままの盆、椀、膳などを作って生業とし、椎喬親王を祖神と仰ぎ、入山許可証をもち、山の神を敬う生活をしていた。

中世から江戸期にかけて、主にブナやトチノキ、ホウ、クリ、カツラ、サワグルミなどの落葉広葉樹や時にモミ、ツガなどを求めて、山中を移動していた。ヒノキ、サワラ、クロベ、トウヒなどは良材として伐採が禁じられていたため、木地師が利用した樹木は主に落葉広葉樹であった。

木地師の生活の場を森林植生からみるとブナを中心とした山地帯（500～1,500m）— 落葉広葉樹林帯にほぼ重なり、中部地方では標高が千メートル前後のブナの森の周辺が該当する。西の滋賀県や鈴鹿方面ではブナの出現高度はもう少し低くなる。これらの地域は植林などに向かない里山とは離れた遠隔の急峻な山々で、村人たちの生活とは競合しない場所である。

余談であるが、木地師の娘には美人が多いと言われている。それは、木地師は高貴の出であり、そのうえ霧の多い山中の小屋に住んであまり陽にやけず、里の疮瘡もここまで及ばなかったからだという。

明治に入って山の所有権が明確化するとともに、木地師たちの自由な伐採は制限され、良材も減少したことにより急速に活動の場を失っていき、農耕定着を余儀なくされたり、町へ降りる者も多かった。

木地師の発祥の地は近江・愛知川上流の鈴鹿山脈西麓とされ、そこから中国、紀伊、四国、九州山地、美濃、白山麓、飛騨や中部の山地、

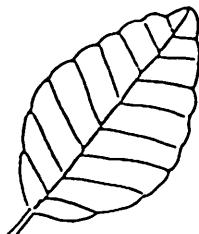
甲信越、会津方面へと広がっていった。愛知県の山間部から東濃、南信州、北遠州にかけても木地師がかなり入っていた。

木地師の活動については、明治から大正にかけて柳田國男氏や折口信夫氏らの民俗研究者が関心を寄せ、三信遠、美濃の県境地帯を歩いて調査している。

この付近の木地師の墓や痕跡をたどってみると、県内では標高千メートル前後の寧比曾段戸山系、面ノ木峠、茶臼山周辺、県外では上矢作町から長野県の平谷、浪合、売木、木曾谷の清内路村方面、静岡県の青崩峠にかけて分布している。千メートルのブナの出現ラインの縁辺部の谷や沢筋に沿うように分布している。さほど標高は高くないが、重疊たる山並みが連なる三遠南信地域の落葉広葉樹の森は、木地師にとって貴重な活動の場であったのだ。津具村の面ノ木園地には木地師屋敷が復元されている。

木の枷には、プラスチックにはない温もりがある。生きていた木と山に住む人々の手の温かさから生まれた道具である。その故郷であるブナの森も今では少なくなってしまった。段戸裏谷や面ノ木峠付近にわずかに残るブナの森を訪れるたびにその美しさが心にしみ入る。新緑、紅葉はことのほか。木々が光を浴びて輝く時、森の中から木地師の娘がふと現れてくるような錯覚におちいるのは幻影であろうか。ブナの森は民俗の世界へと誘う森でもある。10月下旬には、面ノ木峠一帯は 紅葉に染まる。

\*ブナについての本は多いが、「ブナ帯文化」梅原猛氏他著、新思索社 3,800円が面白いと思います。



# ヒメボタル観察の10年

相地 満(風の会)

## 1 はじめに

ヒメボタルを私はこの地方を代表するホタルだと思っている。そのホタルの観察を始めて今年で10年になる。そこで10年に及ぶ記録を簡潔に整理してみた。その結果、かって相当広範囲に発生数も多く観察されたこのホタルではあるが、現在、急激に生息地を奪われ、発生数も極端に減少しているということがわかった。96年の調査は不都合が重なり、はなはだ行き届きな結果ではあったが、その分を差し引いても生息地の消滅や発生数の減少傾向は歴然として明らかである。

このホタルの行く末を案じ、一文を記しておきたい。

## 2 経年変化の記録

表1は、10年間に及ぶ観察地の経年変化を表している。10年間に40か所の観察地を見守り続けてきたわけである。細分化すれば更に観察地数が多くなるが、煩雑になるので大きくまとめにしてあるところも多い。味鋤と地蔵川については発生時期に訪れておらず、大西直美さんの報告による。勤務地の東海市中央部から観察を始め知多半島全域と名古屋市東部へと観察地を広げていった。瀬戸市・尾張旭市・日進市・長久手町辺りまで観察地を広げ、尾張丘陵から知多半島先端までの精密な分布を明らかにしていこうと思っていたが、1シーズン一人で40か所の観察・調査が私にとっては限度のようである。ヒメボタルの発生期間は短く、発生地によって少しずつずれてはいるが、それでも3週間ほどの間に集中して行わねばならない。しかも、深夜22時から午前2時ぐら

いの間にである。夜間の調査は職業を持っているものには比較的時間が取りやすいが社会的に様々な制約が伴う。そこで、今後は少し方法を変えていきたいと思っている。

表1を見ていて最初に気付くことは、著しい数の減少と生息地消滅の増大である。特に東海市域の減少・消滅が激しい。かってこの地はヘイケボタル・クロマドボタルを含めてホタルの里と呼ぶにふさわしい状況を示していたが、現在ではさんさんたんたる状況といわねばならない。わずか10年の間にである。91年に狭い御林の森で見たヒメボタルの乱舞を懐かしく思う。与五八池の埋め立ててもこの地のホタル地図を塗り替える結果となった。

東浦町・武豊町は比較的安定している。知多半島の中・南部についてはもともと発生地がない。かっては、名古屋市緑区・大府市・東海市・東浦町あたりと、北区から長久手町あたりに発生地が広がっていたようである。その残された部分に今も、細々と光が灯し続けられている。しかし、それもいつまで続くことであろうか。おそらくあと10年の後には壊滅的な状況が訪れるのではないだろうか。



表1 ヒメボタルの経年変化の記録 1996. 相地

固体数／・1～5, △5～15, ○15～30, ◎30～60, ●60～, ／消滅, -不明  
 生息地の規模／I 小規模, II 中規模, III 大規模 生息密度／i 粗, ii 散, iii 密

No	地名	環境	年度										規模	密度	備考	
			87	88	89	90	91	92	93	94	95	96				
1	味鉢	竹藪								○	○	○	/	I	i	消滅
2	地蔵川	河畔の草地								○	○	○	/	I	ii	消滅
3	天満宮	寺社林				○	○	○	○	○	○	-	-	II	-	
4	有松	果樹園に隣接した草地				○	○	○	△	○	△	-	-	II	i	
5	鳴海住宅	二次林に開まれた草地				○	○	○	○	○	○	-	-	I	iii	
6	伝治山	竹藪						○	○	○	○	△	/	I	iii	
7	青年の家南	二次林					●	●	●	●	●	-	○	I	ii	消滅
8	境川	河畔の草地					○	○	○	△	△	-	-	III	iii	
9	新池	集水域・竹藪・二次林					○	○	△	●	●	-	-	I	ii	
10	岡庭池	果樹園脇（谷地田隣接）					△	△	△	●	●	/	/	I	i	消滅
11	七社	寺社林						△	△	△	△	/	/	I	i	消滅
12	荒太神社	寺社林	△	○	△	△	△	△	△	△	△	●	-	I	i	消滅
13	弥勒寺	寺社林	-	△	△	△	△	△	△	△	△	-	-	I	i	
14	北島	二次林に近い民家	-	△	△	△	●	●	●	●	●	-	-	I	i	
15	姫島神社	寺社林	○	○	○	○	○	○	○	△	△	-	-	I	i	消滅
16	南島	プール（元池）脇竹藪	△	△	△	●	△	△	△	●	●	/	/	I	i	消滅
17	富木島大地	集水域・竹藪・二次林	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	I	iii	
18	御林	二次林（谷地田に隣接）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	-	II	iii	
19	船島小南	二次林（谷地田に隣接）	○	○	○	○	/	/	/	△	△	/	/	II	iii	消滅
20	旭	水路畔	△	○	○	△	△	○	○	△	△	●	-	I	ii	
21	与五八池1	集水域・竹藪・二次林	○	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	II	iii	消滅
22	2	湧水に隣接した果樹園	○	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	II	iii	消滅
23	3	二次林（谷地田に隣接）	○	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	II	iii	消滅
24	大光寺池1	集水域・竹藪・二次林	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	I	ii	
25	2	草地（二次林に隣接）	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	I	iii	
26	3	二次林（果樹園に隣接）	△	○	△	○	△	○	△	○	△	△	△	I	ii	
27	東海南高西	果樹園脇（谷地田隣接）	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	I	i	
28	東中南	二次林（果樹園に隣接）												I	i	
29	平地	川に隣接した草地												I	i	
30	こうしん坊	川に隣接した二次林												I	i	
31	石浜	川に隣接した草地		○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	I	ii	
32	南陵中西	二次林（畑に隣接）												I	i	
33	大谷	二次林												II	i	
34	稻荷池1	集水域・竹藪・二次林					○	○	△	△	△	△	△	I	ii	
35	2	集水域・草地							○	○	○	○	○	I	iii	
36	3	二次林（果樹園に隣接）							○	○	○	○	○	II	ii	
37	4	二次林（池畔林）							○	○	○	○	○	I	ii	
38	富具岬	寺社林							●	/	/	-	-	I	i	
39	時志観音	寺社林							○	○	○	△	△	I	iii	
40	岩屋観音	寺社林							●	●	●	-	-	I	i	消滅
年度別観察地数			16	17	17	21	21	28	33	37	39	40	18			

他に名古屋城・香流川・東海市上野台公園・愛知健康の森の予定地・大府市深谷宅・長久手町・東浦町・犬山市などのヒメボタルが良く知られている。そこには、それぞれの観察者がいて観察会がもたれているところが多い。そのためこの表からは除外した。また古くから篠島のヒメボタルが知られているが正確な記録が集積されていないので、ここに紹介する程度に留める。

96年は、十分な調査が行われず現状不明になっている箇所が多い。

### 3 生息観察地数と消滅数

表2は、生息観察地数と消滅数、及び消滅の原因と考えられる事柄を挙げたものである。40の観察地のうち13が既に消滅している。消滅数の最多のは東海市であり、大府市・東浦町・常滑市・武豊町・南知多町については引き続いた生息が観察されている。

消滅の原因の主だったものは道路や河川敷き工事による草地や森・二次林の破壊と生息地の孤立化である。これらはこの地方におけるヒメボタル消滅の2大要因と考えられる。つまり、道路建設・土地改良・ため池や谷地田の埋め立て・宅地造成などによる人為的で大規模な決定的破壊と生息地の孤立化である。生息地の孤立化とは広範囲に連続して広がっていた生息地が分断され安定を保つことができなくなってきたことをいう。寺社林は都市開発の中にあっても比較的保存されやすい。それに伴いヒメボタルも細々と生息を続けることができていたが近年急速な勢いで数を減らしている。40の観察地のうち8が寺社林であったが既に4が消滅し、2も極端に数が少ない。比較的数の多い天満宮と時志観音は周辺に森や生息地が広がっている。ヒメボタルは雌の後翅が退化し、発生地から飛んで移動することができない。そのため環境の破壊に弱く、狭い場所に閉じ込められた場合、遺伝的な形質が弱くなっていくことが考えられる。消滅していった観察地において特異な雌が観察される場合がしばしばあった。色も薄くて茶色っぽく、胸の赤色紋も目立たない小さい雌である。光は強くて見た目には普通の雌と変わらないので捕獲してみないと分からないが手に取れば明らかに別種と思われるほど形質の違いがあった。今、このタイプの雌が表れているところがあるので注目しているが、やはり数の減少→形質の違う雌の出現→消滅の過程をたどっていくのではないかと思っている。

ヒメボタルのことを、かってこの地方においてはヌカボタルと呼んでいたという。その呼称がどれぐらいの広がりをもっていたのかは良く

分からぬが実際にヒメボタルを見てもうとそれよりももっと小さかったという。ということであればこの形質の違うタイプのことを指しているのかとも思うが、今は定かではない。

### 4 生息数と生息密度

表3は、生息数を5段階にわけ、観察地がどの段階にあるかを判断し、集計したものである。この生息数は観察地におもむいた時の観察数を表しており、1シーズン中の発生数の総数を表したものではない。1シーズン中に数回訪れている場合は、その際観察された数の平均値を表している。15以上のところが多かったが、93年を境に15以下のところが多くなっている。私の観察地は小規模のところが多い。表1の付記にも記してあるが名古屋城外堀や東海市上野台公園・愛知健康の森予定地などはかなり規模が大きく発生数も多いようである。これらの観察地では、かって1000匹を超える数の報告（新聞の報道）があったがその現状はどうなっているのであろうか。他の観察者の報告を待ちたい。

表4は、消滅地の規模と生息密度を表したものである。孤立化による自然消滅の場合は規模も小さく、密度も低いが工事による破壊は生息密度の高いところで行われている。

表5は、生息地の環境を15に分類し消滅の度合いを示したものである。竹藪・寺社林・谷地田に隣接した二次林の消滅の度合いが高く、ため池集水域の竹藪・二次林で比較的良好に生息が保たれている。ヒメボタルは陸棲のホタルであり、ため池から発生するホタルではない。しかし現在の都市化、あるいは劣悪な環境条件の悪化の中で、そこに存在しているため池が周辺の自然環境の保全に何らかの役割を果たしていることは明らかである。それは、気温や湿度の調節機能であったり、多様な生物を育む機能であったりしている。ヒメボタルの場合は、幼虫の餌となる陸貝の確保や生活環全体を通してある程度の湿度が必要である。ため池の自然はそれを可能にしているといえる。

表2 生息観察地数と消滅数 1996 相地

観察地	数	消滅数	消滅の原因
名古屋市北区	2	2	河川敷改修1・孤立化1
名古屋市緑区	5	1	道路工事1
大府市	1		
東海市	19	9	道路工事4・埋め立て1・孤立化4
東浦町	4		
常滑市	2		
武豊町	4		
美浜町	2	1	不明1
南知多町	1		
計	40	13	

表3 観察地数と生息数 1996 相地

年度	観察地数	生 息 数					観察地消滅数		
		1~5	5~15	15~30	30~60	60以上	消滅	消滅の累積	不明
87	16		6	7	2				1
88	17		4	5	8				
89	17	1	6	2	7		1	1	
90	21	1	7	9	3			1	
91	28	3	7	13	3	2		1	
92	33	3	9	7	7	1	4	5	
93	37	3	13	8	4	1	2	7	1
94	39	3	13	11	2	1		7	2
95	40	3	14	10		1	2	9	3
96	40		3	3			3	12	13

消滅の累積数が表1と一致しないのは、一度消滅したと思われる富具岬の森へ93年以後調査に出かけておらず、現状不明としているためである。96年は、十分調査が行えず、不明になっているところが多いが、生息地そのものがなくなっている場合が多いので、消滅数の累積数が多くなっている。故に調査の精度を高くしても消滅の累積数はこれ以上減ることはない。

表4 消滅地の規模と生息密度 1996 相地

規模と生息密度	数	消滅の原因
I - i (小規模-粗)	7	孤立化6, 道路工事1
I - ii (小規模-散)	2	道路工事1, 河川敷改修1
II - iii (中規模-密)	4	道路工事4

表5 環境と消滅の度合い 1996 相地  
(○は生息地の数、●は消滅地の数を表す)

No	生息地の環境	生息地と消滅地数	傾向
1	竹藪	●○●	規模により消滅 竹藪内の通路・空地が必要
2	寺社林	○●○○●●○○	急速に消滅していく傾向
3	果樹園に隣接した草地	○	発生数は、ごくわずかになっている
4	二次林に囲まれた草地	○○	比較的良好
5	ため池集水域の草地	○	比較的良好
6	河畔(川)の草地	●○○○	改修工事におびやかされる
7	谷地田に隣接した果樹園の脇	●○	発生数は、ごくわずかになっている
8	湧水に隣接した果樹園	●	生息地消滅
9	果樹園に隣接した二次林	●○○○○	道路工事などがなければ比較的良好
10	谷地田に隣接した二次林	○●●	谷地田の埋め立てにより消滅していく傾向
11	川に隣接した二次林	○	生息区域が狭く限られており危険
12	畑に隣接した二次林	○	発生数はごくわずかになっている
13	ため池集水域・竹藪・二次林	○○●○○○	埋め立てさえなければ比較的良好
14	果樹園に隣接した水路の脇	○	生息区域が狭く限られており危険
15	二次林に近い民家の庭	●	生息地消滅

## 5 おわりに

かって私は、協議会ニュース34号(1991.7)に「私のフィールド・東海市のホタル」と題してヒメボタルのことを中心に書いている。観察を始めて5年が経過していた。その時、東海市のホタルがやがてこのような惨状を示していくとは思いもよらなかった。しかし、その翌年、船島校区(東海市)のホタルについて書いたとき(「フィールドワーク第2集」)には、19か所あった同校区の発生地が92年には10か所に減ったことを例にとり、「かってホタルの里と呼ぶにふさわしい発生状況を示したこの地のホタルもあと数年で私たちの眼前から姿を消して行くかも知れません。」と書いた。まさにその通りとなった。それから4年後、船島校区のヒメボタル発生地は2~3か所となってしまった。こういう現実を私たちはどう受け止めていけばよいのだろうか。

「愛知の動物」(昭和59年)や「愛知県の自然環境・1984」のヒメボタルの項を見る

と私の観察地は調査者がいなかつたためだろうかちょうど空白になっている部分である。その空白区のほぼ全域を調査したことになる。その結果、この地には、かなりの密度でヒメボタルが生息していることが分かった。10年に及ぶ調査の結果である。そして今後も新たな生息地が記録されていくであろう。だがその数はそう多くはないはずである。それよりも問題は、確かめられた生息地が次々と消えていくという現実である。

自然への指向性が高まっている現在、ゲンジボタルやヘイケボタルに対する関心の度合いや保護への意欲、あるいは保全への技術獲得の熱意は決して低くはない。しかし、ヒメボタルとどうであろうか。一部の趣味的な愛護の動きはあっても確実な保全への動きは皆無に等しいのではないだろうか。

そういう現実を何とかしたいものである。

1996. 7. 27 (土)

## 会員紹介

### 自然観察歴3年生

#### のこのごろ

首木 雅夫（名古屋支部）

寒くて眠れなかった11月の横浜『子供の国』での自然観察指導員講習会。あれから3年がたちました。観察会に参加することが第一と都合のつく限り各地の観察会に出席。勉強のために東山植物園のガイドボランティアにも登録し文字通り自然観察びたりの生活です。お陰様でガイドにも指導員活動でもそれなりに勤まるようになりました。

単純に感動ばかりしていた頃と違い観察の方法もシビアさが加わり、知識も増えたこともあり楽しい充実感の味わえるこのごろです。

最近パターン化してきた観察スタイルは、持ち物をできるだけ減らし取材型の観察に徹しております。ご参考までにご紹介します。

- ・A4のプレートに白紙5~6枚。
- ・FとBの鉛筆と4色ボールペン。
- ・10倍のルーペ（写真用）。
- ・現地の情報、今何が見れるかを詳しくメモ。これが大変役に立ちます（種の特定には）。
- ・現地では、気をひいたものに出会ったら迷わずメモ、スケッチをする。サイズは指の物差\*で正確に。私のような素人は知らないものが多いのでその場で記録しておかないと後からではまず思い出せない。目で見てメモる。これが一番です。
- ・帰宅をしたら、その日のうちに図鑑などで補足（筆）。サンプルがあればスケッチをし着色まで済ませる。ここまでやっておくと後から調べる時に本当に助かります。それにこの作業は結構楽しいものです。みなさんはどうされていますか！例会などでお会いできたら、ぜひお話を伺いたいですね。

### わたしの自然観察

岡田 速（西三河支部）

自然観察といえば、とかく海や山へ出掛けたり、森や林の中でするものと思いがちである。だが考えて見れば、家の中や田畠の仕事をしながらでも、自然観察はできるものである。要はその人の考え方によると思う。

私事になるが、定年退職して6年余の今の生活は、1週で2日間は依頼されて幡豆町の植物調査へ、あと3日間は畠仕事に、残る2日は研究会や読書などで自由に暮している。この週3日の畠仕事が、わたしの自然観察の時もある。

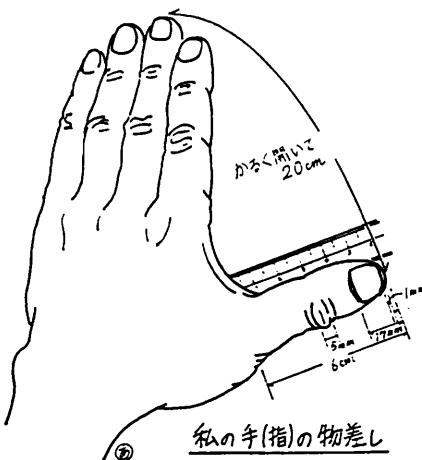
畠仕事は、作物を収穫するときの喜びもあって、一番楽しいと言われている。だが私は、草を取ったり耕したりするのが楽しい。

次々と現われる草を眺めながら、その名前を考えてみたり、花や実の付き方などを見ながらすると、疲れも全然感じない。草に付いている卵や幼虫、土の中や枯草の下より突然飛び出す虫など、瓶に入れて持ち帰る。

夜になると、図鑑を片手に晩酌しながら種類を調べると、夜の更けるも忘れ夢中になる。時間を掛けてやっと分かった、草や虫の名前は印象深くて、絶対に忘れることがない。

明くる朝は、「ごくろうさん」と、虫達を自由の地に返してやる。

皆さんも、こんな自然観察はどうですか。



## 会員紹介

### 消えかけた植物等

今泉洋良（奥三河支部）

私の住んでいる新城市西部地区「豊川右岸花崗岩質土」で、貴重なものではミカワバイケイソウは植林と下草刈りで、モウセンゴケは低木や、草本の生い繁りで湿地が失われて見当らなくなりました。この二つは現在ゴルフ場工事の中に入ってしまいました。

又雁峰山麓の自然池が、水田の基盤整備の工事で池の改修で干上がって、タナゴがいなくなってしまいました。

昨年から地元の造林組会の係として作手村に接した、雁峰山頂の近く30haにも及ぶ山へ月一回位の割合で、界回りや下刈、間伐と時期に合せた管理に出かけますが、ここでも私の幼いころは、春にはササユリ、秋にはキキョウ、ナデシコ、センブリなど、どこでも見られたものが、植林、林道の開通等で、大勢の人の出入り等、いろいろの要素が重なって減ったと思われます。

こんな矢先、石川奥三河会長始め数人で、初夏のころから、月一回市内の大木や貴重な植物を見て回り、今迄に日吉のクスノキや、庭野のムクノキなどは、市民に良く知られた木もあるが、まだ他にもあるものを大勢の人に理解していただき、永く保存していける方法を、模索、考えながらということで始まりました。

今迄に主なものは、サイカチ、ナギの大木、イタビカズラ「雌木」の大径藤木、コウホネの群生、カギカズラの繁茂している株、市内唯一のミカワバイケイソウの植生地等を見てきました。

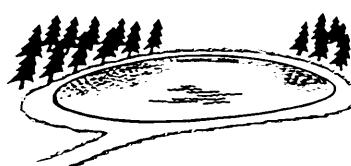
今後は、東部地区のヒメシャラの大木や、南部地区では蛇紋岩植生では貴重なところもあるので、市内全域を回るのは時間もかかるでしょうが、その成果の出ることを願って皆さんのお伴をしているところです。

### 善師野観察会を始めて

平井直人（尾張支部）

昨年の暮れから毎月第4土曜日に犬山市の北部に位置する善師野で、尾張支部の山田博一さん、近藤義裕さんといっしょに観察会を始めました。名鉄広見線善師野駅からスタートし、東海自然歩道を歩きます。途中には民家、田んぼ、桑畠、神社、竹やぶ、雑木林、溜め池と、人の関わりを強く持った多様な自然環境が善師野にはあります。

冬、春、初秋と月一回ですが歩いてみると次から次へと新しい発見があり、楽しくて仕方ありません。それも、田んぼの畔、雑木林と畠の間の縁、桑畠、神社の参道の脇、溜め池の縁など何でもないところに何かがある。それだけまだ自然が頑張っているのだと思います。しかし、アレチヌスピトハギと隣り合わせでヌスピトハギが種子をついている姿を見ると、崩れかけているバランスがいつ大きく動きだすのか気になります。9月の観察会で溜め池の水を抜いている地元の人に会いました。池の底に溜まった泥を取るためとのことでした。3年おきに行っているが、去年、一昨年と雨が少なく、飲料水にも使えるようにしばらく水を抜いていなかったそうです。そして、池のブラックバスに困っている、池の周囲の雑木林に車で入り、ごみを捨てていくマナーの悪さにも困っているという話を聞きました。車では入って来られないようになるとおも言われました。地元の人たちが地元の自然を大事に守っていることを強く感じました。この関係がいつまでも続いてほしいし、この観察会もそのための力になれたらと思います。



## 会員紹介

### 海の観察会あれこれ

榎原 靖（知多支部）

知多支部では、例年、県委託の観察会を海岸で行ってきたが、今年から従来行ってきた観察会に加えて、ミニ観察会と称して各市町村単位で観察会を持とうという方針を打ち出して、できるものから実施している。そんな関係で海で行う観察会の数が一気に増えることになった。秋口を迎えて、海で予定していた行事が一通り済んだので、まとめてご報告しようと思う。

下表に一連の海の行事を示した。

この他に東浦町の境川でシギ・チドリの観察会が行われている。

それぞれについていろいろ書く余裕はないが、海の観察会は概して子どもに人気がある。日頃見慣れぬ生き物に接して、海岸のあちこちであがる歓声がうれしい。海に近いという知多の特色を生かして今後も充実させていきたい。新たなフィールドの開拓も必要なので協議会会

員諸氏の情報を願います。

ところで、昨年、日本自然保護協会が催した「スノーケリングによる海の自然観察」という研修会に参加してきた。海の中に入り込んで観察をするという趣旨であるが、普段我々が行っている観察会は、干潮時に干出した生き物を見るか、潮だまりの中を覗くのが主になっている。しかし、海の生き物たちが本当に生き物らしい活動をするのはむしろ満潮時の水の中で、そこでは干潮時には見ることのできない生き生きとした様子が見られ、感動も大きいことを学んできた。器材や施設や人材などの制約で「海の中に入りて観察する」目論見はまだ実現していないが、目論見だけは持ち続けようと思っている。



実施日	観察会名	場所	参加者数	メモ
3月17日	「大谷海岸の地層と海岸生物」下見を兼ねて	常滑市大谷海岸	指導員7人 +子1人	地層がよく見える。亜炭層、火山灰層など。
4月20日	「磯の生物」県委託観察会 下見	美浜町富具崎海岸	指導員9人 +子2人	風が強く寒い。
5月19日	「磯の生物」県委託観察会	美浜町一色海岸 富具崎海岸	約25人 +指導員10人	砂浜と岩礁を比較して観察。
6月2日	「砂浜の植物と干潟の生き物」	常滑市鬼崎海岸	約40人 +指導員10人	子どもが多く、砂浜での海岸動物の観察に終始。スナビキソウは健在。
6月16日	「干潟の生き物観察」	知多市新舞子海岸	約5人 +指導員5人	広報不足で参加者少。
7月14日	「大谷海岸の観察」	常滑市大谷海岸	不詳	ケーブルTVの取材あり。
9月8日	「矢田川の生き物」	知多市矢田川下流	22人（指導員を含む）	海ではないが、河口に近いので見られるのはカニなどが主。

## 弥勒山麓にて

山田果与乃（尾張支部）

9月14日 曇り後晴 観察会の下見

都市緑化植物園をあとに、通称ダンプ街道をしばらく歩くと、右手にオオアレチノギク・セイタカアワダチソウなどの茂った草むらが目に入ってくる。踏み込むと、なだらかな斜面には表土がえぐり取られ粘土がむきだしになった細い小道が上方にのびている。南側は、マツを主体にヒサカキ・ネジキ・ナツハゼなど荒地回復途中の二次林となっている。息がはずみかけた頃、伐採でむき出しになった見晴らしのよい小さな台地に出る。

前方は大谷山の稜線であろう、シイノキのもこもことした盛り上がりがS字状に浮かび、雨あがりのせいか美しく輝いて見える。

植林帯を右手に大谷林道へ出ると、ウラジロガシ・ヤマザクラの高木が孤立して、その下にはベニバナボロギクの紅色が綿毛と入り混じって花期の長さを物語っている。幅広く伐採された脇道には湧水が見られ、トウカイコモウセンゴケ・コケオトギリなど湿地性植物がかろうじて生きながらえている。突き当たりの林道に入ると、曲がり角には湧水を頼りに生き続けたヒメコヌカグサ(絶滅危急種)が実を落としてもう形をとどめていない。

やや薄暗い林道は、ツブラジイの大木が立ち並び、冷っこい空気がとても心地よく、しっと

りと肌を包んでくれる。

しかし、それもしばらくの間だけで、前方には無残に伐採された斜面を嫌でも見なければならない。

昨年まで咲き誇っていた

アケボノソウの群落は、カレハキツネタケ跡方もなく削り取られて泥土の下に押しつぶされ、アカシデの群落も丸太となって谷間に落とされ、幅広く砂利が敷きつめられた管理車道となっている。大金を投じて何のための破壊なのだろう。いつも心が痛む場所である。

チャートがのぞく沢をまたいで樹林帯に入ると、ヤブツバキ・シキミなどを下にホオノキ・ハリギリ・コハウチワカエデなどが茂り、コースの中では最も樹種に富んだ斜面である。ここから尾根に登らず、下りの小道とすることにする。やわらかい腐葉土を持ち上げたキイロイグチ、倒木にしっかりと取りついたカワラタケ、漫画に登場する様なホウライタケ、あんぱんを思わせるノウタケなど黄紫赤白茶で花のないけものの道は、キノコの花盛り?となっている。種類の判別にとまどいながらも「ワッ」と驚いたり、「ヘエー」とつぶやいたり、皆足元ばかり気になってしまふ。落ち葉で敷き詰められた小道は足にやさしくふうわりと身体を支え、自然に足どりが軽くなってくる。所々には緑色のどんぐりが葉をつけたまま枝先ごとふうわりとのっている。

左手の植林帯が途切れる頃、ツブラジイがわずかに見られ、クロバイ・ソヨゴが続き、リョウブ・タカノツメ・ヒサカキと空間をうずめているが、結構木もれ日もさし込み、何となく樹々の精気があたり一面に満ちあふれている。小道の両側がせまり、昔防火帯だったと言われる



枝ごと落ちたコナラの実

あたりは、ミカワツツジの他は幼木が多く、コシアブラ・アオハダ・ウワミズザクラに加え、ヤマウルシ・ヤマハゼなどが顔をなでられそうな高さに育っている。アズキナシの大木を目印に右手の木立ちの中の急坂を下るとダンプ街道である。

何十年かかったであろうこの里山も今ようやく植生が快復し、保水力も安定するかに見えた現在、山腹をえぐって幅広い無用と思われる管理車道が作られようとしていることを、そして大型機械力で自然破壊がなされつつあることを深く反省すべきではなかろうか。

### 9月23日 晴

みろく山麓自然観察会の有志6人、集合場所の三角駐車場より歩いてかぐ下方へ向かった急な階段を下までトントーンと下りると、築水池のほとりに出る。向う岸にはクロミノニシゴリの群生が見られ、その右手には減水で現れた泥土がのび、ちょっとした丘のように見えている。ここには絶滅危急種、希少種など次々と幾種類も確認されている。こちら側の岸辺に沿った散策道は、マンサク・ネジキ・タカノツメなどで木かけのトンネルを作っている。足元がぬかるんでじめじめした所には、イボクサ・ミゾソバ・ハシカグサとルーペが大活躍ですっかりミクロの世界のとりこになってしまう。

道草はこれ位にして、本命の築水池北岸へ向う。ロッグハウス調の休憩所より築水池を右手に見ながら歩く散策道は、斜面の中腹を削り取り、V字型に落ち込んだ幾つもの小さな谷間を階段でつなぎ、砂利道のアップタウンコースとなっている。何十年もかかってようやく積もった腐葉土が所々ずれ落ち、ネジキなどが緑色の葉をつけたまま仰向けとなって倒れてしまっている。リョウブ・アオハダ・タカノツメは葉を丸め、ちりじりとなって枯死寸前で、ヤブツバキは頭を深く垂れ、もう支え切れない風情となっていて、その他立ち枯れの木が目に付く。お互いに助け合ってきた木々が、周囲を伐り払わ

れたことですっかり孤立し、真夏の陽射しに耐え切れなくなったのであろう。伐採跡には庭園樹のガクアジサイ・クチナシ・ミツバツツジなど多量の肥料とともに植栽され、ようやく株立ちとなって再生し始めた。ソヨゴ・マンサク・モンゴリナラなどは邪魔者のようにむしり取られている。

途中まで来ると草刈り作業の人々に出会い、散策道両側5mは草花、幼木共全部刈り取るとの状況を知り、皆愕然となりやりばのない怒りを覚える。こうなってはせめて絶滅危惧種だけでも何とか助けたいとの願望が一致し、早々ヘビノボラズ・サクラバハンノキなどの幼木には「刈らないで」のエフの取付け作業となった。しかし、草花はどうしたらよいだろう。小さな湿地の点在する中でも、最も大きい湿地と見られる斜面の真中は散策道で切断され、長年にわたって生え続けた貴重な植物は心ない人に持ち去られ、アジサイ・クチナシ・シラカバなどが多量の肥料とともに植栽され、貧栄養が必要な湿地環境が脅かされている。

先は腹ごしらえと残された木々の木陰選んで早々お弁当とする。その時2匹の犬を放したまま散策させている夫妻に出会い、注意を促したところ、「何の権利があつて犬を差別するか、うちの犬は絶対噛みついたりしない！」と怒鳴られてしまった。何とか理解を得たいと願っても空しい結果となってしまった。夕方までの間に何匹の犬たちがこの湿地内を駆け回ったことであろうか。

大勢の人々に開放することと自然環境を守っていくことのいかに難しいかを痛感させられた一日であった。

株立ちを1本だけ残されて枯れてしまったマンサク



# 定例観察会

## 猪高緑地観察会

堀田 守（名古屋支部）

### 【地域の概要】

名古屋都心東部に位置する「名東区」の猪高緑地を紹介します。地下鉄東山線「本郷」駅より市バスで約10分の所に位置し、車では、東名高速道路「名古屋IC」に面した南側に接し雑木林に囲まれた、面積約66.2ヘクタールの緑地帯が通称「猪高緑地」と呼ばれています。

### 【観察会の経緯】

1985年、現在の自然観察コース入口前にある名古屋市名東社会教育センターで、自然講座が開催され開催され、講座終了後、当時の受講生メンバーにより、ここの自然をよく見ていこうとの趣旨で、朱雀氏（当時東山工業高校教師）他により音頭がとられ、第1回の自然観察会が開催されました。以降、観察会開催の都度、新聞等で呼び掛けがされ、自然が好きで観察会に賛同された一般参加者も加え、名東自然観察グループとして観察会活動が始まりました。連絡協議会名古屋支部主催自然観察会は、毎年3月21日（春分の日）、9月15日（敬老の日）に開催されています。定例自然観察会は、学校の週休2日制の導入にともない、第2（土）又は、第4（土）を原則開催日として、毎月1回観察会が行われています。

### 【観察会の特徴】

参加者は新聞で公募した一般の人と地元の人で、年齢層は幼稚園児から老人までいろいろな方が参加されます。支部主催の観察会は、毎年定例化している影響もあってか、多いときには約100名近くの参加者があり大観察会となります。しかし、毎月の定例観察会は、新聞を見ての参加者も2~3名ほど参加され、平均すると約15~20名程度の参加者で開催されています。観察会でのグループ分けは、その時の参加者・指導員数によって子供グループ、初参加

者グループ、参加回数2回以上のグループに分けて行います。

初参加者を対象とした観察会指導では、猪高緑地の地理を覚えて頂く事と、ここの自然の状態を知つてもらう事を目的として行われます。

2回目以上の参加の方を対象とした観察会指導は、本日の観察ポイントを知らせるだけで、自分なりの興味のある自然の観察をしてもらい、指導員は道案内をするだけで、「一緒に自然との対話を楽しみ」「自然と人とのかかわりを考える」スタイルで行われています。観察会では、名前にこだわる人もでてきます。そんなときは、興味がわいて目についたもののポイントを一緒によく観察、メモをとり自分なりに、そのものの名前を付けてもらいます。そして家に帰つてから正式名を自分で調べてもらうようにしています。

### 【自然の状況】

猪高緑地は、名古屋市内で周辺が開発されていく中、まだ、昔の里山の自然が残されています。緑地内にはため池が數カ所あり、中でも一番大きな池が「塚ノ林池」と呼ばれています。塚ノ林池の周りには、水田や畑、雑木林があり、休耕田が放置され荒れ地となり、現在は「たんぼの原風景」も見るも無残な姿に変化しつつあります。そうした手つかずの自然放置場所には、いろいろな動物・植物・昆虫が見られます。まさに「自然の宝庫」と呼ぶにふさわしい所です。塚ノ林池は透明度もよく、水質・水量とも良好な状態が保たれていますが、保全もされず放置された雑木林・杉林内では、竹が勢力を増してきています。また、昨年より緑地の南側で工事が始まり、工事の影響か？ため池が一つ水枯れしてしまいました。今後の事業計画によっては、緑地全体の自然への影響が心配されています。

# 定例観察会

## 平戸橋自然観察会（草だらけの会）

山原 勇雄（西三河支部）

この観察会は地域の人達に自然の大切さと自然に対する関心度を高めると同時に日頃のストレス解消に役立てるよう人と自然のふれあいの時間を持つての場を目的に、平成6年5月より毎月第4日曜日に、平戸橋いこいの広場を集合場所として、午前9時半より正午までを原則にスタートした。参加者は中年女性が多く男性参加者は3分の1位であり、子供が殆どいない事が少々残念である。このため観察コースは足場の良い所を選び安全を第一に考えている。万一事故発生の事も考え、保険料と資料代を含め参加費を二百円徴収している。観察会では人が造形したもの以外は何でも見るようしているが特に私達に多くかかわりやすいを持つ植物を見る事が多い。その中で名前を覚えるより人と自然の関わりを気付いてもらったり、自然破壊はどうして悪いのかを参加者と共に考え緑の大切さを感じ取る事を重視している。また平戸橋自然観察会は地域よりあまり離れる事なく、平戸橋周辺の自然を四季を通して観察するようしている。周辺は豊かな自然が広がり矢作川の大きいなる恵みで上下流右左岸四コースを天候や四季の自然状態を考えながらコースを設定している。

また観察会で大切な事は集合場所であるが、毎月1回、年12回の集合場所は大きな駐車場があるいこいの広場と決めている。それから小雨時の参加者の迷いをなくすため雨天決行についている。自然現象の大切さと、雨はいつか止むの期待で行い、止めば傘をたたんで雨後の生き生きとした自然の輝きや虫たちの動き、鳥類の行動、また川面の変化を見る事が出来るのも雨の日に観察会をやっててよかったと思うのである。因に平戸橋の位置と周辺の特徴を紹介すると、豊田市の北部に位置し、大正年間より昭和初期頃まで矢作川のこの場所は河川運搬の要所

として史跡が残っている。平戸橋の下流左岸のどうど百々地区には今も昔の栄華を忍ばせる百々貯木場跡が公園化されている。また同じ左岸でここより平戸橋までの上流では数年前より多自然工法によるリバーパークが造られ古鼠水辺公園としてキャンピングやバーベキュー、そしてアユの釣り場として市民のやすらぎの場となっている。また平戸橋の上流左岸には昭和50年頃まで華やいでいた勘入レジャーセンターがあり昔を忍ばれる。対岸には今も中電の周囲の桜が春にはみごとに開花し花見客を集めている。そしてここよりいこいの広場までの右岸沿いに陶芸資料館や民芸館が建並んでいる。またこの付近は人と川との接点が保てる場所で、川釣りをする姿をよく見かける場所でもある。

また毎年彼岸花の咲く頃の敬老の日前後1週間位になるとカゲロウが大発生し新聞、ラジオ、テレビで報じられ夜8時前になると大勢の人がカゲロウの乱舞を見ようと集まる。カゲロウの大発生は一時的なもので夜の7時過ぎよりバラバラ出はじめ8時前にピークになり8時を過ぎるとだんだん少くなり9時前になると全くなくなる。大発生日を当てる事はむつかしいが発生時間は割に正確なのが特徴。大発生のピーク時には平戸橋上の交通は大渋滞、車を運転していて前が見えないありさま、雪のごとく降り積もった路上で急ブレーキをかけようものならスリップ事故、追突事故は免れない。毎年カゲロウ大発生による色々な話題は9月中旬頃この地域には絶えない。またいこいの広場ではこの時期には毎年カゲロウフェスティバルが催されるのが恒例になっている。こんな様々な特色のある地域で毎回20名を数える平戸橋自然観察会（草だらけの会）を参加者と共に今後を語らい末長く続く会にしたいと思っております。

# 事務局から

## [行事結果]

### ☆ 基礎研修会「ゴミ問題について」

〔期日〕平成8年7月7日（出席3名）

〔場所〕中小企業センター〔講師〕県担当者

せっかく愛知県環境部の課長補佐に来ていた  
だいての研修会でしたが、出席がたった3名と  
いう寂しさでした。内容は、近く施行さけるリ  
サイクル法の話が中心で、今後はゴミの量を如何  
に少なくし、リサイクルしていくかが重要な問  
題です。

### ☆ 観察研修会〔梅池自然園〕

〔期日〕平成8年8月10日～21日（出席7名）

〔場所〕居谷里湿原、親見湿原、梅池自然園

長野県の大町近くの2つの湿原を見て、白馬  
村落合の宿に泊まりました。宿の主人夫婦は共  
に自然観察指導員で、夕食の後遅くまで長野オ  
リンピックの話などを聞きました。翌日は梅池  
自然園で4時間の観察を楽しみました。

### ☆ 基礎研修会「水生植物の観察」

〔期日〕平成8年9月1日（出席8名）

〔場所〕青少年公園周辺〔講師〕東 義巳

水田のコナギ・ホタルイ・クログワイ・ヒレ  
タゴボウ・シャジクモと、古いため池で湿地の  
ようになっている場所のサンカクイ・ヒメシロ  
アザザ・ニッポンイヌノヒゲ・マツバヤ・ジュ  
ンサテ・ヒツジグサなどを観察しました。

### ☆ キャンプ研修会

〔期日〕平成8年9月28日～29日（出席11名）

〔場所〕旭高原（東加茂郡旭町）

初日の午後は、旭高原の遊歩道での自然観察  
で、翌日は湿原を中心に見て回りました。夜は  
焼肉を囲みながら、その後パンガローへ入って  
遅くまで話に花が咲きました。

### ☆ 研究会「古地図を利用した観察」

〔期日〕平成8年10月10日（出席2名）

〔場所〕尾張旭市内（維摩池周辺）

研究会という名前がいかめしいためか事務局  
ともに2名だけの参加でした。しかし、大正時  
代の地図をもとに土地利用の変遷、ため池の変  
化、水利用の状況等を観察し、かつての微地形  
を利用した土地の活用に感心したりしました。

さらに、湿地を伴い、後ろに林を控えた感じ  
のよいため池を見つけたという収穫もありま  
した。

### ★ 理事会〔8年度第2回〕

〔期日〕平成8年9月8日（出席12名）

〔場所〕名古屋市公会堂

#### ① 役員の選任

会計を橋本 哲さんに依頼することを追認し  
ました。

#### ② 会員の状況

8月末の会員数は415名です。また、会費  
の長期間未納者、連絡先不明者6名は脱退した  
ものとしました。

#### ③ 平成8年度の事業実施状況

自然観察会、研修会等の各事業は順調に実施  
されています。ただ、研修会等の参加者がいつも  
少ないのが気になります。せっかく経費をか  
けての催しで、内容も難しくなく楽しく行って  
いるものですから、多くの方が気軽に参加して  
欲しいと思います。

経理状況は、委託費収入の減少、機関誌の定期  
発行に伴ってやや苦しくなってきおり、経費  
の節約に努めるとともに、特別会計の一部戻し  
入れや科目的流用などができるとしました。  
なお、来年度から会費の値上げを行うこと  
を検討することとしました。

#### ④ 今後の事業等の進め方

来年度事業は、ほぼ本年度と同様な形で進める方向で、内容は普及部会・運営部会で検討することとします。

なお、万博誘致のような大きな問題に対しては、協議会としても適切な意見表明を行うべきとの意見がありましたが、会の性格、会の立場を考えた場合、それは難しいという雰囲気でした。

### 〔協議会の性格と運営 ④〕

#### 5 経理

協議会の収入は、主に会費と事業委託費で運営しており、委託費は県からの自然観察会や本の原稿作成の委託と、東海財団からの本の原稿作成が主なものです。また、支出の主なものは機関誌の発行、支部への配分金、研修会等の経費、自然観察会の保険料、委託事業経費、事務費などです。

従来は、会の経理は比較的余裕をもって執行していましたが、それは機関誌の発行回数が少なかったことと、県からの委託費が多かったことによるものでした。しかし、県からの自然観察会の委託費が一時は60万円ほどあったものが、今年の場合は36万円まで減り、しかも全額支部への配分金として消えているため、会の執行分がなくなってしまったことが大きく影響しています。また、機関誌の定期発行により印刷費と通信費が増加していることも会の運営を苦しくしています。機関誌の印刷費と会員への通信費は会員1人当たり2,200円ほどになり、会費2,500円のうち事務費等に回せる費用は少なく、他の委託費によりなんとかやっている状況です。

活発な事業活動を行うには、事務局体制が弱いことを前にお知らせしましたが、経費面でもいろいろ制約があります。大幅な事務合理化が今後の課題となっています。

### 会員の動き

#### 【加入】

市川美幸 (尾張支部)  
489 濑戸市新郷町 96  
太田順造 (名古屋支部)  
464 名古屋市千種区千種 1-13-8  
加藤貞亭 (奥三河支部)  
441-19 凤来町只持字中貝津 41  
鈴木 隆 (奥三河支部)  
441-13 新城市字宮ノ後 22-2  
滝田久憲 (尾張支部)  
464 名古屋市千種区桜ヶ丘 57

#### 【脱退】

家城 司(名古屋支部) 戒田英一(尾張支部)  
杳名 弘(西三河支部) 黒田 章(名古屋支部)  
田村強生(知多支部) 中村光廣(名古屋支部)  
村田 昭(奥三河支部)

#### 【住所変更】

浅井聰司 441 長久手町長湫字丁字田  
17-62  
荒巻敏夫 441-25 稲武町稻橋字竹ノ下 12-7  
教員住宅 1-1  
伊東真希 441 豊橋市富士見台 4-23-4  
(旧姓 水野)  
佐々木和治 496 津島市鹿伏兎町下春日台  
12-10  
星野 博 492 稲沢市稻葉 3-6-16  
  
村田由紀子 462 名古屋市北区福德町 3-2  
藤澤方  
山本尚三 509-02 可児市川合 858-1  
グリーンハイツ川合 306



## 行　　事　　内

### ☆基礎研修会「地形地質の観察」(野外)

期日：平成8年11月4日(休) 9:30～14:30 昼食持参

場所：宮路山(音羽町) (集合：名鉄本線「名電赤坂」駅)

講師：高橋康夫

### ☆話題の地見学会「土岐市のシデコブシ」

期日：平成8年11月9日(土)

場所：岐阜県土岐市のシデコブシ自生地

地下鉄本郷駅から自家用車乗合せで出発(8:30頃) 事務局(佐藤)まで申込

### ☆研究会「古地図での自然観察②」

期日：平成8年12月1日(日)

場所：岡崎市内 (集合：名鉄「岡崎公園」駅9:30集合)

## ❀❀❀「各地の自然」❀❀❀

### ▼矢田川にアユ

矢田川の千代田橋付近で、平成8年6月にアユを2匹採取しました。(手嶋君男)

★「各地の自然」コーナーの原稿をお待ちしています。自然界の変わった動きなどの情報や動植物の生育地の紹介、開発で消えた生物等についての情報を寄せください。

### ❀「自然なにかとアンケート」

機関誌のシリーズとして、自然に関するアンケートを時々行います。第1回は「自然の中で気のこと」をテーマにしますので、各地の自然に接している時にどうにも気になったことを葉書に書いて、編集部(近藤)までお寄せください。今回は、11月25日までお願ひします。

### ❀編集後記❀

秋の空は青く、高く感じます。チリや水蒸気が春に比べ少ないからだそうです。気持ち良く、過ごしやすい時期ですが、一雨ごとに約1℃づつ気温が下がる時期もあります。風邪などひかずに豊かな自然がいっぱい感じられるようにしてみたいと思います。(近藤)

## ＝　目　次　＝

アンケートからみた自然観察会の動き	1
ブナの森の民俗－木地師の残像	4
ヒメボタル観察の10年	5
会員紹介	10
青木雅夫、岡田速、今泉洋良、 平井直人、榎原靖	
弥勒山麓にて	13
定例観察会	15
猪高緑地観察会	
平戸橋自然観察会(草だらけの会)	
事務局から	17

